
魔法少女リリカルなのは～ソードダンサー～

道化の死鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜ソードダンサー〜

【Nコード】

N8468J

【作者名】

道化の死鬼

【あらすじ】

一人の退魔師が仕事を終えて、故郷に帰ってきたのが運命の始まりだった

故郷に帰る（前書き）

超————半人前で誤字・脱字が有るかも知れませんが初めての小説なので、魔法少女リリカルなのは〜ソードダンサー〜宜しくお願いします。

故郷に帰る

第1話

ある昼下がりの公園で、一人の少女が急に大きな声で叫んだ。
「???」

「私は、鳴海にかえてきたぞー」

それを聞いた、回りの人たちはびっくり様子だったが少女を見て、ああこの子かと顔をして

いつもの感じに戻った。

「???」さて、翠屋にいくか、なのは達元気かな？」

少女は足元の荷物とお土産を持ち翠屋に歩いていった。

数十分後翠屋に着いて、入ってすぐに土郎さんと桃子さんが声をかけてくれた

土郎「いらしゃいませ、ああハサハちゃんお帰り」

桃子「ハサハちゃんのお帰りなさい元気だった」

私は、桃子さんに抱かれながら答えた。

ハサハ「はい水無ハサハ京都からかえて来ました。後、これお土産の八橋です」

土郎・桃子「ありがとう。なのは達ならまだ学校だけど、どうするここで待って抱いていくかい？」

と言われて少し考えたが私は言った。

ハサハ「今日はやめときます。図書館に行って本を読み漁りたいので、それと私が来たのは、

黙っておいて下さい。会ったとき楽しみがあるので」

笑顔で土郎さんたちは頷いた。その後、チーズケーキとコーヒーを食べて翠屋を後にした。

その後、図書館に入ってホラー小説を読もうとした時、車椅子

に乗った一人の少女が本を

とろうとしているが取れなくて困っていたので取ってあげた。

ハサハ「この本でいいの、あと読みたいもある？」

???「ありがとうございます。それやったら後もう一冊そこにある本お願いできるやろうか？」

ハサハ「これね、あ、私は水無ハサハていうんだ。あなたは」
???「あ、うちは八神はやていいいます」

それぞれ自己紹介したあと、趣味が高じて私たちは親友になり
2時間ほど話してから、

はやての家に行き夕ご飯をご馳走になった。その時私の悪い癖
で、たまにかわいい子や物などを

抱きついてしまう癖が出てしまった。はやても初めは驚いてい
たが許してくれた。

ハサハ「じゃあ、また来るからね。その時はロールケーキ作っ
て来るから」

はやて「わかった。また来てや」

そういつてはやての家を後にした。

今は、夜の八時半過ぎではやての家を出てから三十分位にある
公園でスライム状の物体と、

戦っていた。

ハサハ「はあー何なのよこいつ、妖怪の類かな」

と言いながら、最低限の行動で迫りくる触手を避けながら相手
を視ていた。

ハサハ「うーんあの宝石みたいなのが、コアかな？まあ試して
みるか。斬ー！」

仕事道具の刀で斬ると、スライムは原形を留めることができな
くて宝石だけ残して、消失した。

ハサハ「ああ疲れた。このまま抛って置くと危険だから封印し
て持っておこう」

なのはの家に帰ろうとした時、空から女の子が降りてきた。

故郷に帰る（後書き）

道化の死鬼「ふう、やっと始めることが出来た。あ、今後は死鬼とよん、げふ」

後ろから主人公の水無ハサハがハリセンで後頭部をいい音させながらたたいた。

死鬼「なに叩いてるの？」

ハサハ「前置きはいいいから、早く次回の話を書きなさい。それと私の紹介も

早めにね！！」

死鬼「わかりました。だから、あの技はやくめくてく下さい」

ハサハ「まあ、こんな作者ですがよろしくお願いします」

死鬼「書くスピード遅いですがよろしく」

死鬼・ハサハ「次回に向かってセットアップ」

千客万来（前書き）

死鬼「始まりました第2話、ここで戦闘シーンがありますので楽しんで
　　いって下さい。あ、そろそろ主人公のハサハが着
　　てしまうので、私は

にげます。それで、」

と言って作者は逃げた。そこに少し遅れて怒り気味のハサハがきた
ハサハ「死鬼は何処いたの、え、逃げた仕方ない、後書きに先回
りしとこう

あ、それでは、ソードダンサー始まります」

千客万来

第2話

??? 「その手に持っているジュエルシードを渡して下さい」

と言って金髪にツインテールをした黒い衣を纏った一人の少女が私の後ろにいた

私は、一瞬ほど驚いたがすぐに冷静になって彼女を観察して分かったことが幾つかあった

とっても可愛らしくてそれでいてなんて、可哀想な眼をしているのだろう。

それを見て彼女の友達になりたいと強く願った。

ハサハ「私は、水梨ハサハと言います。お友達になりませんか？」

と言ったら少女は驚いていた所に、さらに追い討ちをかける様に私は言った

ハサハ「貴方のような可愛いことお友だちになりたいのそれでお名前は？」

??? 「えっと、フェイト・テストロッサていいます」

フェイトちゃんは戸惑いながらも答えてくれたがすぐに冷静になって攻撃をしてきた。

フェイト「いくよ、バルデッシュ」

バルデッシュ<イエス、マイマスター>

むーう、なのはと同じで意外と融通が利かない仕方ない少し寝てもらおう。

ハサハ「幻影の風」

と言いながら技を発動させた同時にフェイトちゃんの攻撃が当たったと思ったら私の体が急に

霧のように消えたのでフェイトちゃんとバルデッシュは狐に化かされように驚いたところに

素早く首筋に手刀を喰らわせて気絶させた。

バルデッシュ<マスター>

ハサハ「大丈夫よ寝て貰っただけだから、それに話して仲良くなりたし

バルデッシュ<マスターに何かしたら、私が許しませんよ>

ハサハ「良いわよ、それとフェイトちゃんが目覚めるまで話しよう」

バルデッシュ<わかりました>

その後、フェイトちゃんにタオルケットをかけてからいろいろと話をしていると目覚めたが

まだ寝ぼけているのでお茶を出して飲ませてから、バルデッシュから聞いたことを話すと、

バルデッシュは怒られた。

ハサハ「はい、これ」

といってジュエルシードを渡した。フェイトはいいのという表情をしたので私は笑顔で言った

ハサハ「良いんだよ、フェイトちゃんはお友達なんだから」

フェイト達は言った

フェイト「ありがとうハサハ」

バルデッシュ<ありがとうございます>

その後、フェイトたちと別れてから家に着いたのが11時過ぎだった。

後日、私は前にはやてとの約束した。ロールケーキを持ってはやての家に向かっていると

事件が起きた。私の目の前で親友のアリサとすずかが黒いワゴ

ン車に乗った数人の男達に、

拉致されて連れて行かれたので、私はすぐに追跡を始めた（自転車で）

数十分後、町外れの廃工場に着いて、すぐに妖気を感じたので助けに移行した直後に

男の声と銃声が聞こえたので行って見るとそこは血の海の真ん中に男の死体と少し離れていた所

アリサ達と男達を殺した妖怪の太百足がいた

そいつが、ずか達の所に向かったので私は太百足の行く手を遮った。

太百足「誰だ、貴様は、まあいい餌が増えたただけだ」

と言いながら、私に向かって攻撃をしてきたので、攻撃を避けながらこんな事を止める様に

説得をしたが聞き入れてくれなかったので強制的に止めさせる事にした。

ハサハ「はあゝあまり殺したくないんだけど」

と溜め息をしている間に太百足が攻撃しようと向かってきたがいつの間にか結界を張られて

攻撃が遮られた。

ハサハ「次に生まれ変わったときはいい妖怪になると良いね」

と呟くと太百足は真つ二つになっていた。私はそれが死んでいるか、確認してからこの場所を

お払いした。

ハサハ「疲れたここの結界が弱くなっているわね。修繕していいこう」

その後、ハサハは警察にアリサ達任して、後処理を行ってからはやての家に向かっていた。

千客万来（後書き）

ハサハ「よし、先回り成功かな？さてどうお仕置きしようかな。
ん、何

手紙、死鬼からですて！？」

ハサハに黒子は手紙を渡した。内容は次回ハサハの紹介をします。

楽しみにね（笑い）

ハサハ「ち、逃げられたか、まあ次回の楽しみが増えただけか。
次回に向かってセットアップ」

自己紹介（前書き）

今回は少し出ます

死鬼より

自己紹介

第3話 番外編

ハサハ「ん—— よく寝た。おはよう、火乃香 カービィ」
火乃香「おはよう、お姉ちゃん」

カービィ（笑顔）

私達は目覚し時計の音で目を覚まし、修行始める、修行内容はまず、素振り千回、

シャドー組み手を3セットして最後に20キロほど走る。それを終えてシャワーを浴びて、

朝食作るのが私の毎朝の日課だ。そして、朝食を食べて、学校に行こうとした時、作者が現れた。

死鬼「おはよう、みなさん今回の話は自己紹介なので各自していく様に、あーそれと今は、

時間凍結してあるので逃げないで下さいね」

ハサハ「ちっ、読まれてか仕方ない、終わった。これ解除しなさいよ」

死鬼「はい、分かっています。それでどうぞ」

名前・水無ハサハ

年齢・10歳で1月30日生まれ

性別・女の子

容姿・髪型は三つ編みで長さは腰まであり色は黒、瞳は普段は黒だが半妖化になると真紅になる

好きな物・料理で特に御菓子作りがプロ級、火乃香とカービィ嫌いな物・タバコ、酔っ払い、仲間を傷つける奴

身長／体重・145cm／データが消されている為分かりません。

魔力変換資質・『風』

魔力ランク・Sランクだが半妖化するとSSSランク以上になる

術式・古代ベルカ式と妖術

戦術・鞍馬式戦術

仕事・退魔巫女で灘杜神社に所属している

本来の姿・烏天狗

デバイス説明

名称『火乃香』

形状・普段は勾玉型のペンダントで戦闘時は刀型のインテリジ

エントデバイス兼

特殊ユニゾンデバイス

バリエーションジャケット・巫女装束

名前・星のカービィ

年齢・不明

性別・不明

ハサハが8歳の時に召喚してから家族として暮らしている。それと言葉は喋れない

火乃香<こんな感じかなで良いよね。お姉ちゃん、カービィ>
カービィ（喜）

ハサハ「うん、ありがとう火乃香、これで良いわよね。死鬼」

死鬼「今回はこれでOKです。そのお礼で様々な事が書いてある
この森羅万象の書をあげます」

ハサハ「まあ、ありがたく頂くね。それじゃ学校に行ってきた
す」

死鬼と火乃香とカービィは手を振って見送った

自己紹介（後書き）

死鬼「次回、なのはとレイジングハート出会いを書きます」

ハサハ「あれ、ユーのは？」

死鬼「あんな陰獣知りません」

ハサハ「まあ、あんまし好きじゃないから良いか。それでは行きます」

ハサハ／死鬼／なのは／レイジングハート「次回に向かってセツトアップ」

死鬼「いつの間に、さすが魔王様だ。そして私は逃げます」

後日、死鬼は血を流しながら発見された。

PS 壁に血文字で魔王様

と書かれていた

なのはとレイジングハートの出会い（前書き）

死鬼「大遅れましたがどうぞ、楽しんでいって下さい」

なのはとレイジングハートの出会い

第4話

ハサハ「ここでいいのね、火乃香」

火乃香くうん、ここからジュエルシードの魔力反応とデバイス反応がするの>

私は辺りを見回すとなのはが謎の化物に襲わそうになっていた
ので、助けに行った

ハサハ「ふう、ぎりぎりセーフ。大丈夫だった、なのは」

なのは「ふえくハサハちゃん、どうしてここにいるの？それと
その格好!？」

なのはは混乱していた。まあ仕方ないか、今のあたしの姿は、
巫女装束に刀型デバイスを持ち

そのデバイスを使いまるで舞を舞っているかのように戦ってい
るから

なのは「ハサハちゃんきれい」

ハサハ「ありがとう、それとなくのはなんでこんな時間に出
歩いているのか、

これが終わったらたっぷりお話しようね」

目が笑っていない状態で笑顔で言ったら、なのはは、にゃー
ーと叫んでいると

なのはの前にさきまで私達の話を見ていたフェレットが真紅の
色をしたデバイスを持ちながら

こう言った。

フェレット「お願いです。力を貸して、僕はある物を探して違
う世界からやって来たけど

僕一人の力では想い遂げられないかも知れないんだ!! 迷惑なのは分かっている。

お願いです。お礼は必ずします。魔力を操る力を僕に貸して下さい」

なのはは今日2度目の混乱をしていた。まあ仕方ない、助けたフェレットは喋るは、魔力を

操る力が有るなど言われたなだから。少し助けるか

ハサハ「なのは、貴女はまだ入り口にいるのだから引き帰す事が出来るのよ、それでも

助けたいなら、私も力を貸すから」

なのはじっくり考えて、大きな声でこう言った。助けたいと

ハサハ「OK、そのデバイスが起動するまで時間稼ぎしているから早くね」

頷きながら、なのは達は離れていった

フェレット「じゃあ僕言うように言って」

なのは「うん」

なのは・フェレット『我、運命を受けし者なり、契約に元、その力を解き放て

風は空に、星は天に、そして不屈の心は、この胸に、この手に魔法を

レイジングハート・セットアップ』

と言うとレイジングハートはとても強い光を放った

フェレット「なんて魔力なんだ!! 落ち着いてイメージして、

君の魔法を制御する魔法の

杖の姿をそして君を護る強い衣服の姿を」

なのは「そんな急に言われても、えっとえっととりあえず

これで」

小学校の制服をベースにした白いワンピース。その裾や袖の一部には綺麗な青が入って

胸には大きな赤のリボンが着いてとても綺麗だった

フレット「成功だ」

なのはは、自分の姿に驚いていた、そんな、なのはに抱きついた。

ハサハ「なのは、とっても綺麗だったよ」

なのは「ニャー、ハサハちゃん何時からそこにそれと化物は！？」

ハサハ「なのはが変身してる時から、化物もう倒して中のジュエルシードは封印してあるよ」

なのは達は驚いていたがとりあえず今日は遅いからお開きさせた。

後日、私達はお話しあった

なのはとレイジングハートの出会い（後書き）

今日はお話なしで、それではサヨウナラ

温泉旅行

第5話

なのは「さあ、次はハサハちゃん番だから言おうね!! 私もが
んばって言っただから」

ハサハ「なのは、この話だけは無理」

すずか「駄目だよ。ハサハちゃん、みんなだって恥ずかしかったんだから」

ハサハ「それは、分かっているんだけどこれだけは勘弁して」

アリサ「つべこず言わずに良いなさいとお言う男子が好みのタイプなの!? 言わないと

くすぐるわよ!!」

と言つてなのアリサは手をわきわきさせながら近ずいて来たので、私は逃げようとしたが

なのはが右腕をすずかが左腕を掴んで逃げられない。うゝゝゝ

ん、お父さん、お母さん、

八岐の小父様、今私はピンチですの助けて下さい。と言つても無理だからな。そうだ!

念話中

ハサハ「もしもし、死鬼何処かにいるんでしょ、出てきなさいよ」

死鬼「何ですか? 今モン○ン2ndGの協力プレイで金○子を

討伐中なんですから、手短に

と言うか今何処に居るんですか?」

ハサハ「なのは達と温泉旅行に行く。車の中(ああ、激昂した

ラージ○ンが此方に來たので

切ります」　ですぐに、て、さくくしゅゃく」

念話終了

アリサ「準備も出来たし、ハサハ逝なさい」

ハサハ「字が違うから言うか。て、いやくくくくくくくく」

その後、なのは達を謝らせてみんな温泉から上がり、部屋に向かつて歩いていると反対から

オレンジっぽい感じの紙の色をした女性がなのはに話し掛けて來た。

??? 「はくい、おちびちゃん達」

なのはが驚いていると

??? 「ふくん、アンタがうちのお姫様にちよっかい出した子かい？」

私とアリサは、なのはと女性の間に入りこう言った

アリサ・ハサハ「なのは、この酔っ払い、知り合い!？」

なのは「ううん、知らない」

アリサ・ハサハ「なのはは、知らないでいつているけど、どちら様？」

数秒ほど沈黙した後

??? 「アハハハ、ごめんごめん、人違いだったよ」

といいながら、すれ違いざまに

??? (今夜は子供らしく、いい子にしてな、じゃないと悪い子はガブツといくよ)

念話でなのはを、脅してからお風呂のほうに向かつていた

アリサ「ホント、いやな酔っ払いだったわね」

すずか「なのは、大丈夫だった」

なのは「うん、もう大丈夫だよ、だからハサハちゃん放して」

なのはがなぜこように言ったかは、私なのはをお姫様抱っこ
したいから、それとなのは

その言葉、却下させて貰います。後、すずかとアリサそんなに
黒い気を出して睨まないで、

綺麗な顔が台無しだから、その後、二人にやってあげたら許し
てくれたが恭也さんに

お姫様抱っこばれて攻撃してきたので返り討ちにして、忍さん
に渡し、夜が更けていった。

死鬼「はい、そこでこれを見ている人まだ終りじゃないよ。で
は、続きをどうぞ」

今は深夜1時で、私は旅館から少し離れた林の中、何故こんな
所に居るかと言うと

なのはとユーノ一緒に、居なくなったから捜索中なのである
ハサハ「はぁ、何処に居るのやらあの二人は、ん、この気の

感じはフェイトとなのは

もう、なにやってんだか、あの子達、結界も張らないで戦闘して、これはきつくお話ししないと。

とりあえず、幻影の風を使って、火乃香、カービィ行くよ」

火乃香くうん、お姉ちゃん、セットアップ>

カービィ（笑顔）

私は、一気に二人に接近したら、二人は驚いていた所をハリセンで叩いて、すぐにお話を始めた

その後、近くに居たアルフとユーノをカービィが吸い込みでこちらに來させて、2時間程

5人でお話した。それと、二人で奪い合っていたジュエルシードは私が預かる事にして、

フェイトとアルフは自分の家に、私達は旅館に戻っていた。

「フェイト、アルフ、なのは、ユーノの間でこんな約束事が決まった。『ハサハを怒らせない』」

温泉旅行（後書き）

死鬼「どうも、今回はハサハが使用する。幻影の風の効果を紹介します」

幻影の風

主に相手に幻影を見せたり、相手を閉じ込める結界の効果が有ります

範囲は、ハサハを中心にした半径2〜3キロまでです

死鬼「あ、もうこんな時間なので今回はこれまで、次回KY野郎が来るの巻き

次に向かってセットアップ」

KY「僕はKYじゃない」

KY野郎が来る

第6話

ハサハ「はーやーてー、あーそーぼー」

はやて「あ、いらしゃい、今日は、G級の竜王の系譜やるんやけど、手伝ってくれへん

GルナZシリーズ作るのに雌火竜の天鱗が足りへんのや」

ハサハ「いいよ、じゃあ、一狩行こうか」

火乃香くはやてお姉ちゃん、私、夜天の書の所に居たんだけど良いかな？」

はやて「かまへんよ」

火乃香くありがとう、行こうか。カービィ>

そういて火乃香達は、夜天の書の所に行った

はやて「それにして、早く6月3日にならへんかな、今からその子達に会うのが楽しみや」

ハサハ「そうだね、それまでに色々準備しないと」

なぜ、はやてが夜天の書の事を知っているかと言うと、私が教えたから更に、いま鳴海で、

起きている騒ぎの原因のジュエルシードの事となのは達の事も、まあとりあえず今は、

モンハンに集中しないと。それから数時間ほどやっている、ジュエルシードの魔力反応が

感じたので外を見ると、なのはが木の化物と戦っていた

ハサハ「はやて、私帰るね、なのは達が昨日みたいに小規模の次元震起しそうだから」

はやて「分かった、また手伝ってな」

私が現場について幻影の風を解除して声をかけようとした時、いきなり一人の魔道士が現れた

「???」ストップだ、ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。

詳しい話を聞かせてもらおうか？」

時空管理局ねえ、確か八岐小父様が働いている所だった筈、後で詳しく聞こう。

それはさておき、どうしようかなこのまま手を出さないで置こうかな。と考えていると

アルフが現れてクロノとなのはに魔力弾で攻撃を仕掛けた。二人はそれを避けている間に

フェイトがジュエルシードの回収に向ったがクロノがそれに気付いて、避けながら、

フェイト達に応戦し、なのはは如何するか戸惑っていると、一発の魔力弾がフェイトに命中して

落下していくフェイトをアルフがうまくキャッチした。それを見ていた私は切れた

ハサハ「あの黒チビよくも、私の友達を傷付けたな、切刻んでやる。来たれ、束縛の鎖

グレイプニール、更に、断裁分離のクライムエッジ」

私は、二つの神具を出して、グレイプニールでクロノの身体を拘束してクライムエッジで

切刻んでからフェイトの所に行き治療を始めるその際なのは達も一緒にこないクロノも

拘束させたまま動く程度に回復させた

ハサハ「来たれ、わが盟友よ、戦いで傷付き者達を、その癒しの力で癒し給え、豊穡の天使、

アルミネ召喚」

次の瞬間一人の天使が現れた姿は茶色髪に若葉色のワンピースを着ている

アルミネく御久し振りです。ハサハ、今日はどうしました」

ハサハ「私の友達がそこで拘束している黒チビの性で怪我をしてしまったの。貴女の力で癒して、

後、黒チビの方も動ける程度にお願い」

アルミネくわかりました>

アルミネが一本のロットを出し振り翳すと、怪我が治っていたアルミネくでは、私は帰ります。また何かあれば呼んでください>

ハサハ「ありがとう。アルミネ」

私と彼女は別れの挨拶を済ませると、彼女は自分の世界に帰っていたのを見送ると、私は

フェイトとなのはの方に顔を向けて話し始めた

ハサハ「今回のジュエルシードと昨日の物を合わせると今二つありますので一つずつ渡します、

ので、今日はこれで終りにして帰りましょう。それとフェイトは、ランダムに転送しながら

帰るように、近くにそこの黒チビの仲間が居るかも知れませんか」

フェイト「解かった」

ハサハ「そでは『ちょっと待て』何ですか、黒チビ」

クロノ「誰が黒チビだ！！僕にはクロノという名前が在るんだ。それと貴様、時空管理局の

邪魔をするのか、邪魔をするのなら貴様を逮捕する。それとこれをすぐに解け」

戸惑いながら、なのはが言う

なのは「ハサハちゃんあんな事言っているけどいいの。それじゃあまたねフェイトちゃん」

ハサハ「いいのよ、どうせ負け犬の遠吠えなんだから、またねフェイト」

フェイト「ウン、またね、なのは、ハサハ」

と言って去っていたのを見送ると何もない空間向っていった。

ハサハ「そろそろ、姿を現したらどうですか？」

???「いつから気付いていたの？」

ハサハ「黒チビが拘束された所からで、あなたは誰？」

???「そこにいるクロノ・ハラオウンの上司であり、母親のリンディ・ハラオウンです。」

武器を収めてもらえないかしら」

ハサハ「解かりました。やっとともに話が出来そうな人が出て来たので、ただし、まだ完全に

したわけじゃないので、拘束はこのままで、貴方達の所に向かいます。良いですよね」

クロノ「なにー」

リンディ「わかりました」

クロノ「かあさん、いや、艦長」

ハサハ「黒チビは黙れ、リンディさん早く転送お願い、じゃあ、なのは行くよ」

なのは「うん、ハサハちゃん」

リンディ「では、転送開始」

クロノ「と言うか。僕の話聞いてくれー」

何か、黒チビが叫んでいたが構わず、アースラに向う私達であった

KY野郎が来る（後書き）

黒子^{ペコリ}

看板を出し書く

次回アースラに行く

アースラに行く

リンディ「初めまして、時空管理局所属艦アースラの艦長、リンディ・ハラオウンです」

ユーノ「ユーノ。スクライヤです」

なのは「高町なのはです」

ハサハ「灘杜神社の退魔巫女、水無ハサハです。それと、インテリジェンデバイス兼ユニゾン

デバイスの火乃香と式神のカービィです」

火乃香<火乃香です>

カービィ<笑>

ハサハ「それと黒チビを返却します」

私は。今までお姫様抱っこしていたクロノを降ろした。

クロノ「屈辱だ。こんな姿クール者や母さん、いや、艦長に見られるなんて、穴が有るなら

入りたい」

艦の隅で物凄く落ち込んでいた。たかがここに来るまで抱っこしてただけなのに、そのとき、

なのはは、羨ましそうにこちらを見ていたから今度やって上げようと思ひながら黒チビに言った

ハサハ「大丈夫よ、同じ9歳の男の持ったくらい、それに、体重軽かったから」

私が言くと、黒チビが怒り出した。

クロノ「誰が、9歳だ、僕は14だーーーーー！！！」

ハサハ・なのは「うそーーーーー」

さすがに私となのはは驚いた

ハサハ「絶対、同じ年だと思った居た。身長も低かったし」

なのは「ウン、私も思った」

それを聞くと黒チビは、また落ち込んだので私は言った

ハサハ「大丈夫よ、その位、そこに居る淫獣に比べたらまだ、小さい方よ」

それを言うとう今度はユーノが落ち込んだ所でリンディさんが話し始めた

リンディ「こほん、話を戻します」

それ聞いて、淫獣となのはがこれまでの事を話した。それを聞いたリンディは

リンディ「そう、立派だわ」

クロノ「でも、無謀でもある」

黒チビに言われてがっくりした淫獣しているように見えた

リンディ「これよりロストログア『ジュエルシード』の回収には、時空管理局が全権を

持ちます」

クロノ「君たちは今回の事を忘れて、それぞれの世界に戻って元通りの生活に暮らすといい」

なのは「でも、そんな」

クロノ「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

リンディ「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないのでしよう。今夜一晩ゆっくり考えて

三人で話し合って、それから改めて話をしましょう」

ハサハ「じゃあ、なのは、協力しないで、私達は独断でユーノを助けよ」

なのは達は驚いたそしてすぐに

リンディ「待つて頂戴」

ハサハ「いや、じゃあ、帰ろうか」

クロノ「ふざけるな、貴様ら、民間人にロストログアを任せてられるか。そんな事すれば、

貴様ら、全員逮捕する」

黒チビは警戒心全開で睨み付けるので

ハサハ「分かったわ、理由は二つ、壱つがこの地球には時空管理局なんて組織なんて無いから、

協力する必要が無いし、でもう壱つが私を怒らせた。ほんとの理由よ！！ねえ、リンディさん」

クロノ「もう壱つの理由？」

ハサハ「そう！！」

私は殺気をリンディさんに向ける。

リンディ「何の事かしら？」

一瞬表情を変えたけどすぐに戻した。けど残念だったね、こっち、こういう仕事しているから

嘘付いているのはすぐに分かるの。あと、なのは達が困惑しているから説明しないと

ハサハ「じゃあ言うね。貴女はなのはの性格に気付いて、その性格を逆手にとって、そのまま

誘導し、自分達の戦力確保と今起きている事件の早期解決させて、更に今後起きる事件にも、

協力要請として使用とした事が許せないの、ということなので、私達は自分達の力で解決します。

さあ、なのは、帰ろうか」

リンディ「待つて下さい」

ハサハ「まだ、なにかあるのですか？」

リンディ「あなた達を騙した事は、謝罪します。こちらも立場上一般人に協力などできません

でもこの事件を解決するため、お願いします。力を貸してください

い」

と言ってリンディさんは頭を下げた。

ハサハ「だってさあ、なのはどうするの？」

なのは「ふえ、私が決めるの？」

ハサハ「うん、これは貴女の運命なのだから、私はそれに少し力を貸しているだけだから、

それでどうするの？」

なのは「私、手伝いたい、そして、フェイトちゃんともっと仲良くなりたいから」

ハサハ「と言う事で私も協力するけど、幾つ条件付で」

リンディ「解りました」

クロノ「艦長!？」

ハサハ「話のわかる人でよかった。では、壱つ貴方達の命令を聞かず、私達の意志で行動させる事

壱つフェイトやその親族の罪が重かったら軽くして上げる事、壱つ私の事調査しない事、以上の

参つです」

クロノ「貴様、ふざけるのこんなのが聞くと思うなよ」

黒チビは怒りながら、私にバインドを掛けたが、私は笑顔で言
った

ハサハ「ええ、聞きますよ、だってここに来た時からこの艦は土蜘蛛に頼んでいつでも、

破壊できる状態なのですから」

全員「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

クロノ「でたらめをいうな」

ハサハ「嘘ではありませんよ、私の魔法<幻影の風>で見えな
いだけでこの艦の目の前にあります

今、解除します」

私が解除すると5メートル以上の大きさの蜘蛛が攻撃態勢で艦
の前に居た

ハサハ「解って頂けましたか。答えは、ハイかイエスでお願いします」

リンディ「条件を飲みましょう。私はこの艦のクルール全員の命を預かっているのですから」

ハサハ「ご協力感謝します。では、今日は遅いので帰ります。なのは行きますよ」

ハサハ「これが昨日、有った事です。はやて」

と言うながら、お茶を飲んだ

はやて「ハサハちゃん、たまに規格外な事するな、後その土蜘蛛どうしたんや？」

少し楽しそうな表情で聞いてきた。

ハサハ「あれですか。あれは単なる幻影です。まず相手を疑心暗鬼にしてから、幻影で

信憑性を付け足しただけです。この事件が終わったら、この事はリンディさんやなのはには

言いますがね」

はやて「そうか、それと今日は泊まっていくんやろ」

ハサハ「はい」

はやて「じゃあ、今日は、ゴットイーターやるで」

こうして私達は夜までやり続けるのであった

アースラに行く（後書き）

黒子2号

看板を出して書く

次回 『魔王様と死神の戦い』

海上で大騒ぎ（前書き）

死鬼「お久しぶりです。皆さん、前回、私の黒子君が後書きで次に

使用するサブと今回の使用するサブをまちがえてしまったので
ここで訂正させてもらいます。では、私の作品

魔法少女リリカルなのは〜ソードダンサー〜第8話お楽しみを・
」

海上で大騒ぎ

回想1

現在、私たちは、アースラのブリッジに居る。何故かという？
ハサハ「こんにちは、リンディさん、これこの前のお詫びの品です。リンディさんには、

超特製激甘抹茶アイスクースペシャルデラックスサイズを、
アースラの皆さんには、

紅茶のシフォンケーキをどうぞ」

なのは「私からは、うちのお店のシュークリームをどうぞ」

それを今まで黙っていた黒チビが文句を言おうとしたが、リンディさんとその他一同に

遮られた。

クロノ「きさm・・・」

リンディ「その他一同「いただきます!!!!!!」」

クロノ「母さん、エイミィ、皆さん、なにやってんですか」

黒チビがリンディさん達に講義すると、目を輝かせながら、リンディさんとエイミィは言った

リンディ「なに言っているのクロノ、せっかくのご好意を無駄にしては駄目じゃないの。」

時間もそろそろ15時になるからお茶にしましょう」

エイミィ「そうだそうだ、そんなこと言うなら、私がクロノ分貰うね!!! あ、ハサハちゃん

艦長のは、私が入れるから、ハサハちゃんはクールのお茶の準備して」

ハサハ「はい、なのは、手伝って頂戴」

なのは「うん、ハサハちゃん」

クロノ「誰が要らないと言った。と言うか、貴様も当たり前のようにお茶の準備をするな」

ハサハ「うるさい、だから、黒チビは年の割りに身長低いのよ。後、そのKY行動を、

どうにかしなさいよ!!」

リンディ・エイミィ「あ、それは、私も思っていたからKY行動を直しなさい!」

その他一同「うんうん!!」

クロノ「みんなして、僕をいじめる」

と言いながら、黒チビは走って何処か行ってしまったが、やっぱり、自分の分を持って

黒チビ、恐るべし、さすがリンディさんの息子!!それから私たちは今後のことを話すのであった

回想1終り

ハサハ「とまあ、こういう事が有りました。どう面白かった。
はやて」

はさて「うん、とってもおもしろかった。特にクロノ君の所が、
ハサハちゃん、早く、続き

聞かせてくれへん!!」

という事で、早く話を書きなさい、作者!!

作者「イエス、ママ」

回想2

私たちは、ブリッジのモニターでフェイトとアルフが竜巻相手に戦っている所を見ている

ああ、これはO・H A・N A・S Iをしないと逝けないなあ。
ハサハ「リンディさん、私たちは現場に向います。行くよ、なのは」

クロノ「その必要はない、放って置けば自滅する。自滅しないで疲労している所を

叩けばいい」

ハサハ「黒チビ、私はリンディさんに話をしているの、後、あんたは馬鹿でしょ」

クロノ「なんだと（怒）」

ハサハ「あんた達は、この前の次元震が起きたから来たでしょ。このままだと、この前よりも

大きいことになるわよ」

リンディ「解りました」

クロノ「艦長!？」

リンディ「クロノ、それに彼女は命令した所で止められないわ」
クロノ「しかし『土蜘蛛』 解った」

ハサハ「それじゃあ、黒チビも静かになった事だし行くわよ。

なのは、そして淫獣!!」

なのは「高町なのは、行ってきます」

ユーノ「ユーノ・・・って、僕の名前は淫獣じゃあないー」
「ー」

淫獣がなんか叫んでいるけど、気にしない気にしない。フェイト、アルフの救助とお仕置きと、

言うなの、O・H A・N A・S Iをおこないに逝きますか。

ハサハ「エイミイさんお願いします」

エイミイ「OKでは、転送開始。ポチッとな!!」

私たちは、フェイト&アルフの所まで転送してもらった

アルフ「あんた達は!？ 邪魔するんだったら、容赦しないよ」

ハサハ「邪魔なんてしないよ。救助しに来たんだよ。それじゃあ、なのはとフェイトは封印の

準備を、アルフトユーノは二人のサポートを、で私はあれをおとなしくさせるから、ヨロシク

後、フェイト&アルフは終わったら、用があるから逃げちゃ駄目よ」

フェイト&アルフ「え、お仕置きだけは許して下さい」

と言いながら、空中で土下座をしたけど、笑顔で拒否した。その時なのはは心中で合掌していた

ハサハ「さてと、やりますか。テンペストブレイカー……」

今使用したのは、私が持っている魔法の中で現在、最も威力高いもので、効果は貫通とシールド

破壊の風の魔法である

ハサハ「じゃあ二人とも、あれいない？どこいたんだろう。あ、あんな所にもしかして余波で

あそこまで跳ばされたのか。いや、失敗失敗」

四人「失敗失敗じゃあない……」

ハサハ「まあ、良いじゃないの無事だったんだし。それより早く封印お願い、嫌な予感が

してならないの、それから黒チビ、今居る所少しでも動いたら、約束を破ったとみなして

全力全壊であんたとアースラの全員を殺して、更に管理局の敵に回ります」

リンディ「クロノ、彼女の言う事を聞いて動かないように、彼女は、本気よ」

クロノ「艦長！？くっ、わかりました」

うん、話の判る人は、やっぱり良いわねと考えている間に四人が封印を終えて、帰ってきた

その時フェイトの向って雷が降って来た

フェイト「か、母さん！？」

えっ、フェイトのお母さんのなのこの魔法は？と言うか、何自

分の娘に攻撃してるのよ。

助けないと

ハサハ「鞍馬式戦術、壺乃型、一鬼刀閃」

私は一瞬でフェイト前に来て、雷を斬った時、魔力の中に妖力が混じっている事に気付いた

私はこの事件ややこしくなりそうと思いながら四人に言った

ハサハ「まあ、今日は色々有ったから今回はここまでと言う事でジュエルシードは六個有るので

三つずつに分けて、今日は解散し、後日、なのはとフェイトの試合をおこないます。言い訳は

聞かないので以上」

私は言う事言って、妖怪退治の準備をする為その場を後にした

回想2 終り

ハサハ「回想2に有ったとおり、フェイトとアルフにお仕置きした時の写真有るけど見る？」

はやて「見る見る！！、どんなしたんや」

私ははやてに写真を見せた。フェイトには巫女装束に狐の耳と尻尾姿のとアルフには

メイド服姿の2ショット写真だった。それを見たはやてがアルフの胸揉みごたえが有りそうやな

とか、フェイトちゃんも将来有望やななどと言ってわたしはここにおっぱいハンターが居る

と思いながら、話を聞く私であった

海上で大騒ぎ（後書き）

死鬼「今度は、間違えないようにね。黒子君!!」

黒子はこくりと頷いたから、筆と看板を出し書く

魔王様と死神の戦い

死鬼「よしよし、今度はうまくいたね。という事でごほうびにマキシマム

トマトをあげるね。後で、食べるように、そして今は全力で逃げる何故かというと、サブタイトルが魔王様と死神にばれたからでは、次回生きていたら、会いましょう!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8468j/>

魔法少女リリカルなのは～ソードダンサー～

2010年10月8日14時43分発行